
六番めの善鬼

森野青果

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

六番めの善鬼

【Nコード】

N1464Z

【作者名】

森野青果

【あらすじ】

見た目は美少年だが、三百年ほど生きた老魔法使いのぼく。全盛期には王国を滅ぼしかけたけれど、さすがに最近は魔力の衰えを感じ始めている。長年連れ添った五匹の使鬼たち（見た目は美女・美少女揃い）も反抗的になってくる。そんなある日、使鬼たちを解き放たなければ、いよいよ命が危ないと告げられる。しかも彼女らは契約を解除されたたん、長年こき使われた恨みを晴らすため、ぼくに襲いかかるだろう。五匹とも使鬼としてのレベルは最強だ。そこでぼくは、六番めの使鬼と契約を結ぶことにした……

ザ・ザの小砂漠を半分わたったところで、月が二つあらわれた。ぼくはガルシアを止めて、斜め前方に起立する岩の上へ目をこらした。蜜蟻酒は好物だが、今夜は一滴も飲んでいない。なのに何度目をしばたかしても、月は二つあるようにしか見えなかった。

宮廷の博士どもがこれを見たら、世界の終わりだのアル・ル・タジール王国の破滅だのと、大騒ぎしたに違いない。

もつとよく見るために、ガルシアから下りて、さらに数歩あゆみ寄った。

風がぱたりと止んでおり、マントは少しもはためかない。空気は澄んでいて、星が瞬くさまがよくわかる。こんな夜なら、あのいやらしい砂蟹どもが這い寄ってきたとしても、気配でわかるだろう。ぼくだって、一晩かけて骨にされるのはごめんだ。

眺めているうちに、月の一つが瞬きした。

「円眼鬼か」

そんなことだろうと思った。どこの誰かは知らないが、趣味のよくない術者が放った使鬼ではないか。

もちろん円眼鬼がザコだというつもりはない。こいつを使いこなす術者は、かなり強力なミワの持ち主でなければならない。とはいうものの、

（趣味がよくないんだよね。古代語を使えば、スタイリッシュじゃないってことさ）

あんなごつごつした化け物と、自身のミワを同調させるやつのが知れない。

円眼鬼は筋肉隆々・フンドシー丁の巨人で、つるんとした頭部のてっぺんから、フィン族みたいな辮髪をたらし、鼻も口もない顔の

真ん中に、巨大な真円形の眼をそなえている。ばかでかい斧を所持しており、五マリートくらいの高さならば、一撃で打ち砕く。

（まったく、趣味がよくないんだよね）

溜め息をついた。

ちなみにぼくが命を狙われる理由なら、星の数ほどある。三百年ほど生きてきたが、悪行三昧の人生であった。もともと、最近はずがにミワの衰えを感じて、ずいぶんおとなしくしているが。全盛期には、アル・ル・タジール王国を滅亡寸前まで追いこんだこともある。

「トシはとりたくないものだな」

傲慢じゃないが、見た目は若い。花も恥らう紅顔の美少年。そのじつ、厚顔無恥な老魔法使いなのだけど。

再び月が瞬いた。やれやれとつぶやきながら、ぼくは左手の指を伸ばし、手の甲を面前にかざした。五本の指には、それぞれ五色の石をあつらえた指輪が嵌まっている。親指から始めて、黄、赤、紫、青、緑……痛みを覚えたように、ぼくは眉をひそめた。

めまいがする。

いよいよミワが使鬼の靈力に、耐えきれなくなっている証拠だ。こんなことなら、剣術使いの護衛でも雇っておくべきだったが、筋肉隆々・フンドシー丁の刺客を前にして、今さら悔やんだところで始まらない。ぼくは右手の人さし指に中指を添えて、指輪の一つに触れた。刺すような痛みとともに、黄金色の火花が散った。

「アール・ミーム・ミール・ワーフ。偉大なる夜の支配者。暗黒の王の御名において、我は望み、我は求む。炎と血の精霊、サラマンドルの眷属。ミランダをここに召還せんことを」

指輪が灼熱し、閃光が弾けた。

紅蓮の炎が噴出し、中空で渦を巻いた。

炎はのたうちながら蛇と化し、トカゲと化し、やがてほっそりとした一人の女の姿を描いた。腰まで届く真紅の髪。額と首と左腕に巻かれた黄金の飾り輪。美しい体の線もあらわな赤いドレス。その

スリットから、ほっそりとした脚を覗かせている。

ミランダは左手を軽く腰にあて、右手に炎の剣を引っさげて、中空から青い瞳でぼくを見下ろした。

「あそこにいるの、円眼鬼でしょ。いやよ、わたし。フンドシ野郎の相手なんて」

ミワが弱まると、使鬼もやたらと反抗的になってこまる。全盛期にはずいぶんいたぶって、いや、可愛がってやったもののなに。

「だれに向かって口をきいてるつもりなの、ビア樽」

「お仕置きされたいのか」

「ふん」

鼻で笑いやがった。ちなみにビア樽のことを、タジール公領の方
言で「フォルスタッフ」と呼ぶ。これがすなわち、ぼくの名である。
ミランダが剣を振り上げ、軽く振り下ろすと、刀身の炎がほとば
しり、一匹の大蛇と化して突き進んだ。こちらへ向かって、だ。ぼ
くは素早く水冷の呪文を唱え、マントをひるがえした。

眉毛が少し焦げた。もう少し対応が遅れたら、美少年の丸焼きが
湯気をたてていたところだ。

「殺す気か！」

と叫んだものの、我ながら愚問だった。今の一撃は勢いこそ弱か
ったが、完全にぼくをロックオンしていた。要するに、殺る気満々。
さてこうなると厄介だ。今夜の彼女はことさら機嫌がわるいし、
ぼくのミワも予想以上に弱まっている。ミワが弱まれば、使鬼を束
縛する力も減少する。大魔法使いだなんてうそぶいているが、しよ
せんは生身の体。使鬼とタイマン張ったところで、勝ち目なんかあ
るわけがない。

（ヘレナを呼び出すか……）

薬指に嵌まっている青い指輪を横目で眺めた。

五匹の中では最も温厚なヘレナだが、血も涙もない悪鬼であるこ
とに変わりはない。ミワによって拘束されていればこそ、命令を聞
くわけで、こんな状態で呼び出せば、ミランダとタッグを組んで襲
ってくる可能性が高い。いや、ぜったいに襲ってくる。

そんなぼくの窮地を救ったのは、意外にも円眼鬼だった。

「後ろだ、ミランダ！」

三マリートはゆづに越える巨体が大斧を振り上げ、図体からは信

じがたい素早さで、彼女の背後にせまっていた。真円形の一つ目が、呪われた鏡のようにきらきらと輝いた。

「言われなくなつて！」

彼女は振り返りざま、炎の剣をひと薙ぎした。閃光が巨人の胴を直撃した。爆音とともに炎が渦を巻き、円眼鬼はおぞましい悲鳴を上げながら、後方に吹き飛ばされた。そのまま背中中で巨岩に突っ込み、ばらばらに打ち砕いた。

澄みきつた夜空の下、ミランダは踊るように身をひるがえした。

赤く発光する髪がなびき、緋色のドレスから、白い脚があらわになった。生意気なやつだし、さっきは殺されかけたが、じつに美しい使鬼というものは、こうでなくてはいけない。

「仕留めたか」

「冗談でしょう。相手が何だと思ってるの？ そんなことも感知できなくなつたんじゃ、あんたもそろそろおしまいね、フォルスタツフ」

「ご主人さまだろう！」

痴話喧嘩している間に、崩れた大岩の塊が四方へ弾け飛んだ。ラマ王の彫像のように円眼鬼が立ち上がり、雄叫びを上げた。さっきの一撃で腹がざくりと避け、傷口から蒼い炎が吹き出していた。片手で斧を引きずりながら、よろよろと歩き、一つ目に憎悪をみなぎらせた。

ミランダの瞳に、世にも高慢な侮蔑の色が宿るのを見た。使鬼は飼い主に似るといふコトワザは、あながち嘘ではない。彼女は優雅に腕を振り上げ、片膝を立てた。いにしえの女神像をおもわせる、「終撃」の構え。

野獣の咆哮にも似た雄叫びを上げながら、円眼鬼は地を蹴って駆けだし、宙に踊り上がった。見る間に距離が縮まったが、ミランダは微動だにしない。巨人は背後になびいた大斧を片手で引き寄せるようにして、水平に切りつけた。

血の色をした炎が、夜空で弾けた。

次の瞬間、炎に包まれた円眼鬼の上半身が、くるくると回りながらはるか彼方へ飛んで行くのを見た。残りの半分がどうなったか、知るよしもない。ひとつだけわかっているのは、円眼鬼を送りこんだ術者が、今ごろ苦しみのたうちながら、あの世への旅路を急いでいるだろうこと。

使鬼の敗北は、即座に術者の死を意味する。相手を抹殺するためを送りこんだ力が、すべて自身に跳ね返ってくるからだ。

月は一つになっていた。さっきより数倍に膨らんだように見える、巨大な満月。その前にたたずんで、ミランダはぼくを見下ろしたまま、赤い唇にすさまじい笑みを浮べた。

「思い知らせてあげましょうか、フォルスタッフ。どちらがご主人さまなのか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1464z/>

六番めの善鬼

2011年12月6日06時52分発行